

沢村貞子著「老いの道づれ—二人で歩いた 50 年」岩波書店 1995 年 11 月 8 日刊を読む

あなたの遺稿

1. はじめに

- (1) 篠山紀信先生の撮ってくださった殿の写真が、居間の正面の飾り棚で、静かに私を見守ってくれる……お気に入りの^{えんじ}臙脂色のシャツを着て——。骨壺は、ちりめんの風呂敷に包まれて、その隣りに……藤色の地色の隅に小さくあしらった臙脂色が、殿のシャツの色に似ているのが、なんとなく嬉しい。
- (2) 私は、その飾り棚の前で、殿の第一稿をひろげた。書斎の机の引き出しにあった、その原稿の字は、かなり乱れている……いつも、見惚れるようなきれいな字を書いていたのに……やっぱり、工合が悪かったらしい。結構、楽しそうに書いていたけれど……。

2. (1) 私たち二人の 50 年の生活を断片的に書き残しておきましょうよ、と約束してから日が経っている。

私が一行書けば相手が一行思い出すという形式で、それも楽しいと思う。

- (2) この間も、なれそめの頃を思い出してみましょうよ、という話になった。私が『都新聞』^{みやこ}の記者時代に京都座で芝居を打っていた国太郎、大介らの一座に加わっていた沢村貞子を楽屋に訪ねたことがあった。

なんでもないインタビューだったが、幕の合間をみて、貞子がおうすを立ててくれた。

- (3) その当時、南座の楽屋にも、よく遊びに行って、鴈次郎、延若、さては辰巳柳太郎、島田正吾らとも親しく口を利いてもらっていたが、楽屋で薄茶の御馳走になるのは初めてで、とても嬉しかった。何か特別の記者扱いをしてもらったように御きげんだった。

この事は貞子も覚えていて、たまたま、この日の夜、市電で乗り合わせ、二条駅で別れた、とも言った。

- (4) 今でも、やはり鮮明に覚えているのは、1 日、二人で宇治へ出かけた日のことである。宇治川を渡って、平等院の美しい建物が、額縁の絵のように前方で見える河原の石に腰をおろして、かなり永い間、話し合った。そのくわしい内容は忘れてしまっているが、ただひとつ、

- (5) 「ぼくは、あなたのことについて、ほとんどなにも知らない。ただ時々楽屋で逢ったり、市内の散歩に出たりして、知り得た知識というか、印象では、ぼくが 40 年近く生きていた人生の中であなたほど純粋で、人にやさしく、善良な女性は初めてだ、こういう人が幸せに生きられないはずはない。兄や弟と芝居の旅興行ばかりしているようだけれど、とに角、若い頃は、日活現代劇で売った名前もあることだし、なんとか、もう一度、東京へ戻って再起をはかられてはどうか、私は引き揚げ者だし、なんの力にもなれないけれど、あなたの再出発の踏み台ぐらいにはなれそうに思う。心もとない男だけれど、踏み台のつもりでつき合ってほしい、なに

かあったら相談相手にしてほしい……」

(6) そんなことをクドクドと言っていたように思う。二人はまだ手を握ったこともなかった。

(7) 世にいう恋愛感情のようなものがあつたにはちがいないが、どうやら、この当時の二人は、ひどく理性的で、中年男女の友情、といった状態だったと思う。

(8) 二人が、それぞれの家庭の事情を振り切って東京での再起を決意したのは、それから間もなくだった。

(9) 後日、貞子は、もしも東京での生活に失敗したら、二人で海外へ飛んでしまえばいい、なんとかなるだろう、と心にきめていたらしい。

(10) 駆け落ちの道行きは舞台では、それなりの情緒はあるが、私たちの駆け落ちは現実生活のきびしさが先立っていて、二人が住む借家一軒探すのも容易ではなかった。暗い経堂駅の前で屋台のそばをすすりながら、大船の仮宿まで帰った日は、さすがに心細かった。

(11) 「誰も味方はいないのよ、二人だけで頑張りましょう」

私は新聞社を辞めて、まだ、つぎの仕事がみつからなかったが、貞子はあちこちの撮影所を訪ね歩いたおかげで少しずつ映画の仕事が殖えていった。

(12) 今は亡くなった田中春男クンの紹介で経堂に一軒、借家をみつけて入ることになった。家財は、加東大介たちが残っている京都に置きっぱなしのままだったので、6畳と4畳半に、狭い台所と据え風呂といった平屋の住居で、ぼくは貞子が電車で働きに出たあと、障子の棧のほこりを払ったり、台所まわりや垣根の掃除ばかりしていた。

何故か、この頃、本らしい本を読んだおぼえがない。こんなことでいい筈はないと思いながら、経堂周辺の散歩が日課だった。

3. おわりに

(1) 殿の思い出は、ここで終わっている。次から次へといろんなことを思い出しながら……書く力がなくなったのだと思う。

(2) 殿——それでは約束どおり、今度は、私が書きましょうね。

飾り棚の上で、どうぞ、ゆっくり見ていて下さいな。

(3) 「まあ、いいだろう、そんなとこだな」

と、言ってもらえるように、いっしょうけんめい、書きますからね。

P15 ~ 20

<コメント>

女優 沢村貞子さんとコラムニスト 大橋恭彦さん御夫妻の 50 年の記録「老いの道づれ—二人で歩いた 50 年—」は、心あたたまるエッセー集。是非、御一読を。

— 2016 年 7 月 27 日(水) 林 明夫記 —